

日時：2009年10月7日（水）13時30分～
会場：東京ウィメンズプラザ

アクアツーリズム

これからの観光資源と水文化

都市への人口集中が進む中、持続的な地域づくりが各地で模索されています。そんな中、定住と交流の両面から、水・水路・里川・暮らしと水文化などが、観光資源として見直されようとしています。水文化は主に定住者が「使いながら守る」と考えられて

いますが、ヨソモノである観光客が水の価値を発見する機会が増えると、人と水とのかかわり方はどう変わるのか。

このような観点から、水文化を観光資源としている事例を紹介し、アクアツーリズムの可能性について考えました。

【問題提起】

「水文化は観光の未来を拓くか？ アクアツーリズムと次世代ツーリズム」 石森秀三 北海道大学教授

「なんでもないものの発見 チッタスロー（地産地消）で地域力を引き出す」 陣内秀信 法政大学教授

「水都大阪の再生 環境先進都市とアクアツーリズム」 橋爪紳也 大阪府立大学教授

「飲める水と生食文化 旅の歴史と未来」 神崎宣武 旅の文化研究所所長

【討論】

「ツーリズムがつくり守る水文化とは」 コーディネーター：神崎宣武 登壇者：上記報告者



問題提起・報告

■かねてより「観光学」を提唱してきた石森秀三さんは、現代がマスツーリズムからニューツーリズムへの変革期と捉え、他律的観光から自律的観光へシフトしていると述べた。アクアツーリズムにおいても、温泉観光地がマスツーリズム時代の牽引役だったが、ニューツーリズムとしてはヘルスツーリズム、エコツーリズム、ジオツーリズムとしての温泉地が現われており、人間の生き方を変えるのに貢献できる観光のありかたを考える上で、水文化は欠くことができない、と主張した。

■都市史研究者の陣内秀信さんは、田園の再評価が地域を豊かにしているイタリヤ諸都市の例を紹介し、「何でもないことに価値を与える発見」という観光の重要性を指摘した。そのような観点から東京を捉えると、墨田区の水路・川・産業・観光地のエコシティへの試みや、東京都日野市の水による地域のブランド化が興味深いという自らの調査体験を元に報告した。

■これに対し、水都大阪を力説したのが都市研究者でプロデューサーの橋爪紳也さん。1937年（昭和12）に制作された船上観光も盛り込まれた大阪観光PRフィルムを上映。当時は、林立する煙突と煤煙の景観が産業都市大阪のブラスイメージだったことを指摘した。その上で、大阪の「水の都」ブランドは伝統的なものだが、現在では、川や水に接する市民の思いを集め大阪の魅力を描き直す試みが始まっていると紹介した。

■ここまでの3人は、表流水を軸としたアクアツーリズムを掘り下げたのに対し、民俗学の立場から日本の文化を見つめ続けてきた神崎宣武さんは、地下水を取り上げた。京都では食用に使用した水が井戸水であったことを紹介し、これは日本各地でも同様と指摘した。地下水は疫病の伝染を防ぐ水だったわけ、ここに日本の和食、生食文化が発達したという。そして、江戸時代以降の旅・移動の増加の大きな要因の一つに、水の安全があったことを忘れてはならないと述べた。

ディスカッション

コーディネーターの神崎宣武さんは「人知の及ばないところへの敬意、そのような自然の恵みがあるという感謝の気持ちだけは私たちがどこかへ持つていなければならない」と述べたが、アクアツーリズムが抱つて立つ文化を抜きにしては、観光の本質はわからないのではないか。そんな大きな疑問を喚起してくれたフォーラムだった。詳細については、当センターホームページをご覧ください。（編集部）

アンケートに寄せられたコメント

水の文化を育てる上で、河川や海といった水害から守ることばかり考える時代から、水を使う時代へと変わっていく必要があると感じた。（学生）

新しいキーワードが新鮮に感じられた。しかし、イメージだけが先行し漠然としたものだった。水をめぐるツーリズムが大きな可能性を持っているのは間違いないと思う。今回のフォーラムを契機に、水辺の再評価をする社会が発展することを期待する。（大学教員）

水、水辺、それらがつくる空間にこれほど共感する人が多くいるとは。トトロの森も、カッパ天国も夢ではないと思う。（市民団体）

水文化をツーリズムの視点から論ずる視点は、大変興味深かった。残念ながら水文化の捉え方が、舟運の復活や食に限られ、もつと論ずべき視点自然との共存、防災などの議論がなかった。そこから出てくる防災教育や環境教育などの議論が重要だと思ふ。（公務員）

■水の文化35号予告

特集「アクアツーリズム」(仮)

人々の暮らしに豊かな水使いがある地域は、元気になれるのではないかと？ そんな地域の魅力を知ってもらうのに、地域資源としての「水」と「人」を定住・交流の両面から再構成する「アクアツーリズム」は有効なのではないかと？ 従来型のツーリズムとは一線を画した、アクアツーリズムによる「地域資源」を考えます。



水の文化 Information

『水の文化』に関する情報をお寄せください

本誌『水の文化』では、今後も引き続き「人と水とのかかわり」に焦点を当てた活動や調査・研究などを紹介していきます。ユニークな水の文化実習活動や、「水の文化」にかかわる地域に根差した調査や研究などの情報がありましたら、自薦・他薦を問いませんので、事務局まで情報をお寄せください。

ホームページのお問い合わせ欄をご利用ください

<http://www.mizu.gr.jp/>

水の文化 バックナンバーをホームページで

本誌はホームページにてバックナンバーを提供しています。すべてダウンロードできますので、いろいろな活動にご活用ください。

編集後記

◆ 今年の初詣の折り、来年1000年を迎える故郷の神社が、神社所有の山から切り出された材で社殿の修繕を行なっていました。人により傳承され、1000年に一度という時空を超える自然と文化の営みがそこには見えた想いがしました。(小)

◆ 物事の本質を捉えない様子を、「木を見て森を見ず」と言うが、そのたとえ通りに願うとするなら、「森」をキチンと作ることに肝要である。「木」を見るだけならたやすいのだが、どんな森にするのか、したいのか・・・。それが見えてこないのが現状だ。(新)

◆ 今回の取材では、いままでもよりさらに知らないことの多さに気づかされた。日本の森林の現状を知り、いろいろな意味で「未然とした」というのが正直な感想。それでも、何とかするための一歩がたくさんの場所で踏み出されていることに、希望がもてた。(百)

◆ 小学生の頃、一番最初に見た舞台が「こどもミュージカル『森は生きている』」だった。ディテールは覚えていないが、森の精たちがたくさん出てきて云々で、素直に感動した記憶がある。今でいう生物多様性の要素もあつたのだろうか？ 森の見た方のチャンスは色々あるのかもしれない。(ゆ)

◆ 森の維持と、子育てとはよく似ている。育てる人が将来食っていけないと婚姻率、出生率が上がらないのは、森も同じだ。子育て支援が結局は一人ひとりが半世紀以上働き暮らしている社会をつくることとすれば、森林維持が求める社会像とは何なのだろう。(中)

◆ 近年、東京の高尾山がパワースポットとして注目されている。神仏習合の寺がパワーの源として紹介されているが、高尾の森を構成する多くの木々や様々な動植物が生み出す「命のエネルギー」こそが、パワーの発生源ではないだろうか。(緒)

◆ 毎日がパソコン漬けで疲弊する中、木製のキーボードが発売された。桁が一つ違う価格に手が出なかつたが、樹脂や金属に取って代わられた木の価値を再度見出そうという試みに好感が持てた。今後に期待したい。(力)

◆ 毎朝、犬と散歩しながら柴を拾って、薪ストーブの焚きつけにする。水は沢水。新緑、紅葉、落葉は腐葉土に。我が家にとつては宝の山だが、薪拾い、水汲みに一日の大半を費やし、砂漠化が進む地も。人と資源のバランスを思う。(賀)

ミツカン水の文化センター機関誌

水の文化

第34号

ホームページアドレス
<http://www.mizu.gr.jp/>

禁無断転載複写

発行日 2010年(平成22年)2月

企画協力 沖 大幹 東京大学生産技術研究所教授
古賀邦雄 水・河川・湖沼関係文献研究会
陣内秀信 法政大学教授
鳥越皓之 早稲田大学教授

編集制作 小田知広 新美敏之 百瀬友美 小林夕夏 中庭光彦
緒方大輔 原田朱野 賀川一枝 中野公力 賀川督明

発行 ミツカン水の文化センター

〒104-0033 東京都中央区新川1-22-15 茅場町中塾ビル9F
株式会社ミツカングループ本社 広報室内

Tel. 03(3555)2607 Fax. 03(3297)8578

ミツカン水の文化センター 事務局

〒104-0043 東京都中央区湊1-13-2 アリス・マナーガーデン11F
Tel. 03(3552)7504 Fax. 03(3552)7506

お問い合わせ